

「未来の担い手育成プログラム研究指定校」実績報告書（1年次）

1 学校名等

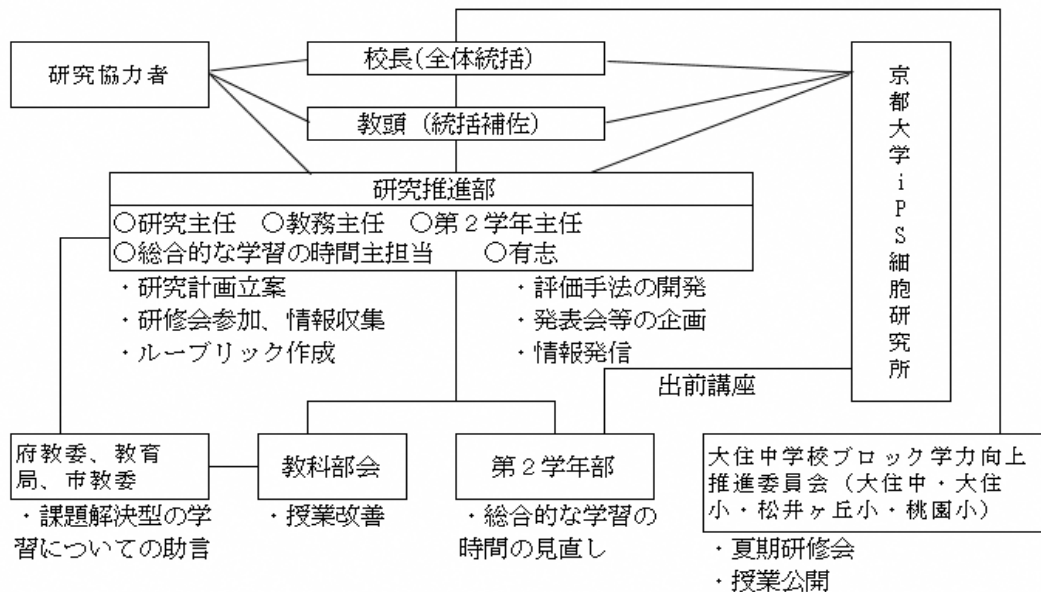
学 校 名	京田辺市立大住中学校				校長名	柳澤 彰紀
研 究 主 題	「学びが変わる」「子どもが変わる」「学校が変わる」課題解決型の学習の充実					
研究の目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題解決型学習を通して、生徒の学びの深化・発展を図る。【学びが変わる】</li> <li>・iPS 研究所との連携による、質の高い知識・論理的思考力・協調性・知的好奇心等を一体的に育成する。【子どもが変わる】</li> <li>・これまでの総合的な学習の時間を課題解決型の学習を軸として展開し、その視点を教科学習の指導改善や道徳科の指導力向上に波及させ、教職員が新たな学びを創造することにつなげる。【学校が変わる】</li> </ul>					
学 年	1 年	2 年	3 年	特別支援	合 計	教職員数 ※校長・教頭を含む
学 級 数	6	7	8	3	24	48
生 徒 数	240	242	283	13	778	

2 研究校の概要

(1) 生徒の実態

全国学力・学習状況調査の結果等から、「各教科の点数としての学力」は相対的に高い状況にあるといえる。ただし、点数として表出しにくい「人と人が対話し納得解や解決策を生み出していく」ための「コミュニケーション力」や「課題解決力」、その意図や結果を他者に伝える「プレゼンテーション力」について、十分に育てられていない実態がある。これらの力の育成は、日常の教科指導や総合的な学習の時間等において意図した課題の設定が必要である。このように、基礎的な学力を身に付けることだけでなく「未来を担う」ために必要なこれらの力を伸ばしていく必要性を抱えている実態である。

(2) 研究体制



### 3 主な研究活動

#### (1) 第2学年総合的な学習の時間における課題解決型の学習

今年度の研究は、第2学年の総合的な学習の時間を中心に進めた（\*表1）。「きょうと明日へのチャレンジコンテスト」への応募だけでなく、課題解決型の考え方ができる力を身に付けることから取り組んだ。「未来」を考える上で、まずは未来をイメージすることから始めた。協働して10年後の未来のイメージづくりを行い、広がったイメージを「iPS細胞」という1つに収縮させた。次に、すでに理科の授業でiPS細胞について学習した3年生が作成した動画で、iPS細胞について学ぶという取組を行った。

これらを基礎として「現在の社会で10年後に絶滅しそうなもの」の課題を解決していくプロセスを経て、「誰もが安心してiPS細胞を用いた治療を受けられるようになるためには、どのようなことが必要でしょう」という問いに向き合い、協働して考える活動を行った。ただ調べたことをまとめるのではなく「解決法」を考えることは、生徒がiPS細胞について知るだけでなく、社会の問題点を多面的に捉えることにつながった。

学習を進めるにあたって、CiRA（京都大学iPS細胞研究所）から支援を受け、iPSに関する講演や、生徒が考えた「解決法」に対して専門的な視点からアドバイスを受けた。それぞれが考えた解決法をさらに改善させ、学年から代表グループを選出し、「きょうと明日へのチャレンジコンテスト」へ参加した。コンテストへの参加があることで「自分たちの発表を見てもらう」という意識から「伝わりやすい発表」「楽しんで聞いてもらうには」といった様々な工夫を取り入れた発表が構成された。

コンテスト当日には1グループが学校代表として参加した。1年間の学びを十分に発揮し、充実した発表を行うことができた。

表1 第2学年PBL授業 実施内容

	内容	実施時数	留意点等
①	10年先の未来を考える	2h	絵を使って表現
②	本校第3学年による「iPS細胞」発表動画視聴	1h	第3学年の理科の授業で発表した内容の動画
②	10年後に絶滅しそうなものを救おう	夏休み課題 (4h) + 1h	探究の過程に沿って個人で考える
③	未来の技術を普及させよう	1h	グループワークで探究の過程を進める
④	CiRAによる講演	4h	「iPS細胞研究について」 「問いについて」
⑥	解決策の整理・分析	4h	探究の過程に沿って、個人→グループの順番で考える
⑦	発表に向けたスライド作成	5h	発表資料作成 (Keynote)
⑧	中間発表	1h	土曜参観
⑨	スライド・発表の修正	3h	
⑩	最終発表	1h	クラス代表決定
⑪	探究の振り返り	冬休み課題	探究学習および発表のまとめ
⑫	コンテスト発表準備	放課後	コンテストに向けたスライド作成、発表練習



【表 1 中① 10 年先の未来を考えよう】



【表 1 中⑤ CiRA による講演のようす】



【表 1 中⑩ 最終発表のようす】



【表 1 中⑦～⑩ 発表用スライド】

## (2) 校内研修の充実

6月27日(月)に全教員向けの職員研修を実施した。まず京都府教育庁指導部学校教育課、福知泰輔氏から、「未来の担い手育成プログラム」の概要説明及び、PBL(課題解決型学習)の指導におけるポイントをお話いただいた。その後、キャリア教育コーディネーターネットワーク協議会事務局長、小寺良介氏より「地域・企業・大学等と連携したPBLの実施」として、PBLの基本的な説明のうへ教員同士のグループワークを行い、PBL授業の流れを体験した。また、職員会議にて2年生の総合の取組の進捗状況を確認し、PBLの実践状況と生徒の変化や身に付いた力について職員への周知を図った。

## 4 今年度の研究の成果と検証

今年度は、3年間の取組における1年目として、教職員が「PBL(課題解決型学習)について知る1年」と位置づけた。その中で生徒の成長と教員の視野の広がりという成果が挙げられる。

### (1) 生徒の成長

グループ活動を通じて、プレゼンテーションを作っていく過程を経験した生徒の中には「正解のない問いに向き合いながら学習をすすめるのは楽しい。」や「ひとりでは思いつかなかった考えにたどり着くことができた。」などといった前向きな印象を語るものもいた。初めは「どう進めていけば良いのかわからない」という声が聞こえ、「正解がない問いについて答えを出す」ということに戸惑う様子が見られた。しかし、グループで話し合い、考えを出し合いながら進めることで「創造する力」が育まれていった。正解がない、解決法が見つからないことが生徒の創造を止めるのではなく、自由な広がりを見せた。学びの中から「正解」を出すのではなく、みんなで話し合い、考え合い、「納得解」を生み出すことで創造する力を育てることができた。

これらの成果は生徒自身の評価からも見られる。生徒アンケートでは総合的な学習の時間の満足度が表2の通りであった。これまでよりも深みのある探究的な活動が実践されたことが、授業に対する満足につながっていると考えられる。

## (2) 教員の視点の広がり

「iPS細胞」という、目に見えない、かつ日常的に馴染みのないテーマを扱いながら取組を推進していくことは教員にとっても困難であった。この研究を進めること自体が教員にとっても正解のない問い（授業）に向かうことであった。研究が進む中で、「そんな発想があるのか」「こんな考え方が出てくるのか」という声が教員から上がった。生徒が自ら考え正解のない答えを探究することを不安に感じていた教員も、研究が進むにつれてこれまでにはなかった「新たな学び」を実感することができた。今後は教科指導にもこの視点を取り入れながら教員の授業に対する意識をさらに広げられることが期待される。また、大学教員から8月、10月、1月、2月と4度の支援を受け、福井県福井市立至民中学校への先進校視察を行った。校内で研究を進めるだけでは気づけない視点が多くあり、研究に広がりがみられた。

表2 R4 総合的な学習の時間の満足度（2年）

項目	%
満足している	67.0
どちらかといえば満足している	30.3
どちらかといえば満足していない	2.7
満足していない	0



## 5 今年度の課題

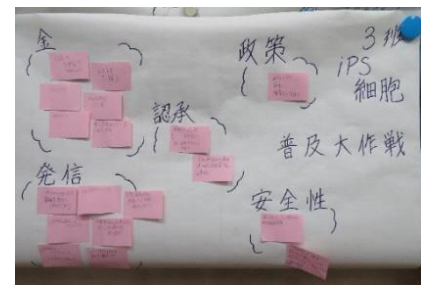
「未来の担い手」として必要な力を身に付けるためのプログラムをさらに充実させていくことなど、取り組むべき課題が出てきた。

### (1) PBLの手法と効果についての実感をも高めること

PBLに関する校内研修を6月に実施することができたが、PBLの視点を取り入れた教科指導をするにはどのような手法があるのか、PBLにはどのような効果があるのかについて、全教員が実感できる段階までは到達しなかった。

### (2) 生徒の実態の更なる分析と研究との連携を深めること

教員全体で、「未来の担い手」として必要なことは何なのか、生徒の実態と合わせて考え、分析することが課題である。今生徒にとって必要な力はどのようなものなのか、実態の分析を進めていくことも課題である。そもそも「未来の担い手」とはどのような状態なのか、どのような力が生徒に必要なのか、原点に戻り、指導者が対話を通して考えを出し合う必要がある。その考えをもとに生徒と一緒に「未来の担い手とはどのような存在か、どんな力を付けたらよいか」という問いを考えていくことができれば、何をするための学びなのかを明確にしていけると考える。今年度は研究を始めることに追われたが、このような課題が見えてきた。次年度は研究が生徒の力に結びつくように教職員全体で考えていくことを重視していきたい。



## 6 事業終了後の研究構想

事業終了後は研究成果を活用し、PBLの要素を取り入れた授業や探究活動を日常として実践していくことを構想する。本校が目指す生徒像「深い学びを紡ぎだす生徒」の育成にはさらに「聴く力」「相手に伝える力」「対話から創造する力」が大切である。事業を通じた生徒への成果、教員への成果、学校への成果を共有し、次の目指す力を明確にししながら各教員が取組を通じて培った経験を活かして、各々が新たな学びを構想しながら、学校としても教員個人としても継続される研究へと発展させていきたい。